

愚なるか故に道なり

奥井禮喜

経営労働評論家
(有)ライフビジョン代表取締役

第57回

「おいしい生活」から「まずい生活」への経験を 活かして、これからは人に「ふさわしい生活」を：

国内消費は一九九〇年代半ばから、ほぼ長期低迷状態にある。消費革命（一九六〇年代）の時代は彼方に去った。たとえば百貨店が合併しても、市場が大きくなるのではないから、頭の痛いことである。そこで「消費者がわくわくするような店作りをせよ」というような言葉が登場する。なるほど「わくわくする」という言葉には

レビ）がその後を引き継いだ。しかし一九八〇年代に入ると主要耐久消費財はほぼ全世帯に行き渡り、世帯単位ではなく個帯単位へとか、メーカーはモデルチェンジに知恵を絞って、早期買い替え需要に期待するしかなかった。わくわくする、欲しい商品が見当たらないというのが、現実の「普通の」姿ではあるまいか。

わくわくする。たしかに欲しい商品を買うときはわくわくする。梱包してもらった商品を、いそいそ持ち帰り、少しでも早く中身を取り出したい。

電化元年と言われたのは一九五三年、三種の神器（電気洗濯機・電気冷蔵庫・白黒テレビ）が大人気、続いて一九六〇年代に入ると3C（カー・クーラー・カラーテ

もちろん、3C以降も、電子レンジ、VTR、パソコン、デジタルカメラ、携帯電話、DVDなど、次々にメーカーの努力は続くが、すでに国内自動車販売も頭打ち、今は地上デジタルへの転換でテレビ特需が発生しているものの、内需を押し上げるような力量感ある商品は見当たらない。

西武百貨店が「おいしい生活」

というコピーを掲げたのは一九八二年だった。味覚は個人的なもの、あなたのおいしい人生、充実した人生のお手伝いをします、という意味合いであった。理屈を見事な感性に包んだコピーは、新しい時代を予見するかのごとくに響いた。

「私にとっておいしい生活って何だろう」と考える。しかし、その思潮が定着する以前に、バブル経済へ突っ込み、一九九三年半ばバブル崩壊して、以来、二〇年近く、国内需要としてはパッとしない状態、感覚的には「いじましい生活」になったみたいであって。

耐久消費財ブームに沸いたのは、人々がその商品を購入して、それを活用する生活に憧れたからである。今や、喫緊に買いたい商品はほとんどない。日常の衣食住は、ぜいたくをいえば際限がないけれど、そこそこか、ほちほちかともかくとして、間に合っている。

内需を上げようとすれば、モノそのものの力だけでなく、人々の生活自体が変化して、一人ひとりが今日的「おいしい生活」を追いかけるような気風が醸成されねばならないのだけれど、馬馬虎虎

(「マーマーフー」) もまた捨て
がたい味わいがある次第だ。とこ
ろで――

一九六〇年代後半、わが国は高
度経済成長を達成したものの、
人々はひたすら「モータレス」に働
くばかりで、ほとほとくたびれて
いた。だから一九七〇年代に入る
と「くたばれGNP」という言葉
において共感したものだ。経済的
公害が全国的に露見した。経済的
繁栄の陰で何か大事なことを見失
っていたのじゃないか。

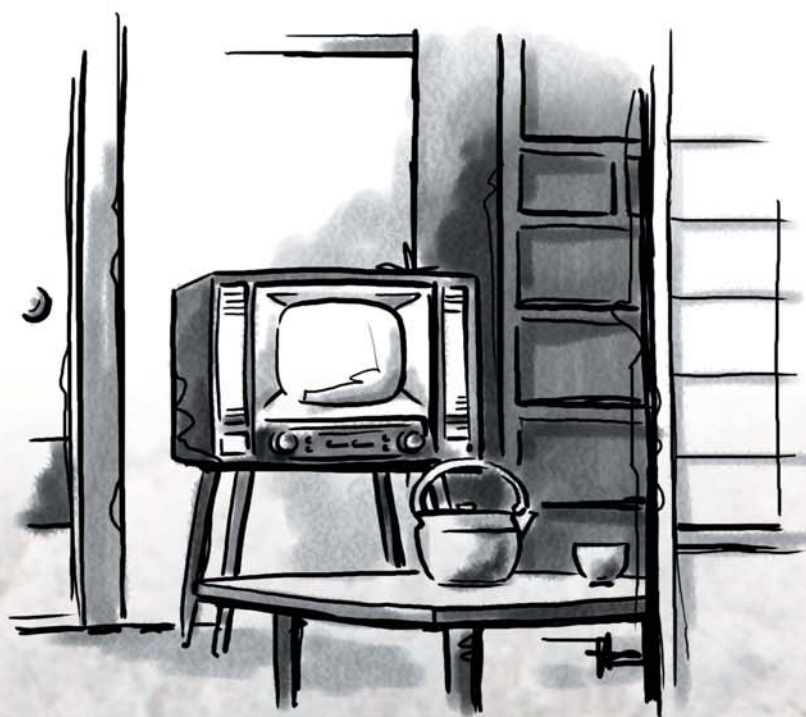
一方、米国はベトナム戦争で軍
事費が大膨張し、財政赤字が慢性
化し、インフレが加速した。ドル
は暴落し国際収支は音を立てて悪
化する。一九七一年八月一五日ニ
クソン大統領は、ドルと金の交換
停止と、一〇%の輸入課徴金賦課
を軸とした経済政策を発表した。
わが国は円切り上げを恐れてドル
買い支えに走った。さらにデフレ
を恐れて建設国債を増発し、国債
発行による財政支出を膨張させ
た。設備投資と輸出で高度経済成
長を達成したが、財政主導型とな
り、インフレ、さらには財政危機
を生み出す転換点になった。お国

大借金の根は深い。

さらに一九七三年秋、OPEC
(アラブ石油輸出機構)の石油輸
出削減、OPEC(石油輸出機構)
の石油価格値上げが発生した。安
い石油を基盤に成り立っていた世
界経済は強烈なパンチを食らった。

当時、都留重人氏は、先進国に
おける素材供給型重化学工業が過
剰生産に入り、米国中心の経済秩
序崩壊による世界経済の停滞を指
摘された。後にみても先進国粗鋼
使用量は一九七四年がピークなの
である。「くたばれGNP」は単
なる感性の問題ではなく、経済の
在り方を鋭く問うていた。わが国
においては、輸出依存でなく、内
需拡大と、国内生活基盤を充実さ
せる工夫が求められていたのであ
る。

しかし、「日本列島改造論」(田
中角栄)が登場し、年率一〇%成
長・高速道路一萬キロ・新幹線九
〇〇〇キロ・石油パイプライン七
五〇〇キロ建設などが打ち上げら
れた。これによると輸入石油量七
億キロリットルを必要とする。世
界石油輸入の半分という荒唐無稽
なものであった。「花見酒の経済」



(笠信太郎)とか、「土地・株式・
商品などの投機」による経済の危
険性にたいして警鐘が鳴らされて
いたが、開発を当て込んだ猛烈な
土地投機が発生した。それが狂乱
物価を招くのである。

今回の金融危機もそうだ。実物
経済を無視した金融経済が世界を
大混乱に陥れた。にもかかわらず、
金融市場の節度ある経営を展開す
るためのシステム作りは容易には
進まない。

金が儲かればよろしいという思

想がすべてを混乱させているので
はあるまいか。物事は「価値の序
列」が大事だ。すなわち経済は
「需要が供給を牽引する」。「消費
が生産(労働)を牽引する」。な
んのために消費するのか、「生き
るため」である。然り、人々が
「生きるために経済がある」。経済
は人々の生活のために発生した。
経済がすべてに優先すると考える
のは正しくないのではあるまい
か。単純な経済成長論でよろしい
ものか。